

松本

て

まり

プロジェクト

松本てまりモビール  
製作ドキュメント



松本市立博物館  
Matsumoto City Museum

2021.4.20

# 1 取材と試作

プロジェクトのはじまりは、2020年11月ころ。企画に加わった土屋先生、小松先生が松本にてまりを乗せる、木製フレームの材質や作り方を市内の工房で検討中。

## 素材は？

2021.4.21



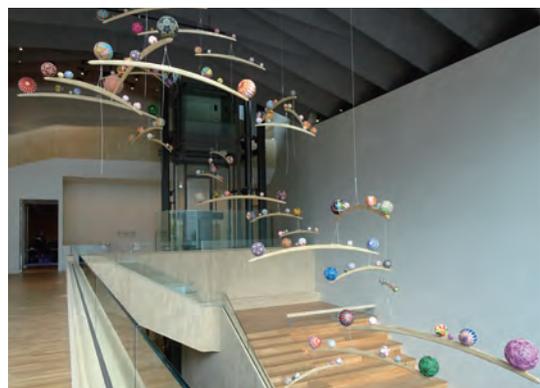
# 松本でまり モビールが できるまで

は始まりました。翌年から大学生との試行を経て市民参加のワークショップがスタート。松本市内で活動する講師のみなさんの指導・アドバイスを、伝統を踏まえつつも、作り手の個性の光る大小さまざまのてまりが生まれました。そのひとつひとつを空間につなぐデザインと設置方法は、アーティストの土屋公雄さんと小松宏誠さんによる創造的かつ綿密な検討と実験を経て決定されたものです。結果、モビール構造が実現し、さらにてまりの支持部分には松本の木工も採用されて、いっそう変化に富む、また特徴ある地域文化に根ざした空間彫刻が誕生しました。てまりを起点にさまざまな人々が集い、協働した本プロジェクトは、新博物館の進むべきひとつの方向を指し示すものとなったのではないのでしょうか。開館の暁には、伝統と現代、技術と創造性、

工芸とアートが交差するてまりモビールのもとで、多くの人々が出会い、また、そのまわりを巡りつつ、さらに階上の展示空間へと誘われていくことでしょう。歴史と今、そして未来をつなぎながら、市民とともに新しい価値を創出する新博物館のシンボルとして、このてまりモビールが来館のみなさんに広く親しまれることを願っています。  
(金井直)

# 松本でまりプロジェクトとは何か

2023年秋にオープンする松本市の新市立博物館には1階エントランスと階上をつなぐ大きな吹き抜け空間がデザインされています。その空間を彩る協働型アートワークの実現を目指して、2020年、松本でまりプロジェクト



# 強度は？

てまりはどうやってつくるか？  
だれでもつくれるか？  
なにでできているか？  
ギモンをひとつずつ解消する勉強会をつづけました。



## 信大金井ゼミ

金井先生のゼミ生、初めてのでまりづくり。てまりに触れたこともない学生さんが多い中、てまりを本当に作ることはできるのか!?

# 2 プレ・ワークショップ

2021.6.28

# 初めてつくった てまりが完成!



だんだんてまりづくりに集中していく学生のみなさん。出来あがった作品と、達成感で笑みがこぼれる表情を見て、なんとかイケそうと手ごたえを感じた日。

# 市民ワークショップ

3

in 博物館旧館

Cコース

2021.10.10



松本てまり  
八重菊  
初級編

みんな同じ“千鳥がけ”をやっているのに、できあがった八重菊てまりの多彩さにびっくりです。



松本てまりの基本柄＝八重菊てまりづくりの入門編。“千鳥がけ”の理屈がわかってしまえば、立体的な柄もできてきます。



Aコース

2021.9.25



まきまき  
てまりを  
作ろう

草木染のきれいな糸をくるくる巻くだけコース。てまりづくり最初の工程＝土台づくりは小さなお子さんにもできる体験です。色選びも楽しい～。



巻くだけといっても、まん丸にするのはちょっとだけコツが必要。一生懸命丸くしたてまりは巻いただけ、もうカワイイ。



Dコース

松本てまり  
八重菊  
上級編

糸を針で平らにのぼす独特の技は、慣れるまでちょっと大変です。



2021.10.09



本格的な松本てまりの八重菊柄をつくる上級編。配色と糸の扱いの美しさが際立つてまりを1日でつくります。



Bコース



てまりに  
模様を  
つけよう

2021.9.26

まきまきてまりにシンプルな模様をつけるコース。てまりの土台をつくって、糸で模様をつけるてまりづくりの基本が詰まった体験です。



針を使うから難易度UP。でも糸色選びの楽しさは倍増。さわりを体験してもらっただけのつもりが、みんな本気になって終わらない。



## 参加者の感想

巻くのは難しかったけど、だんだん楽しくなってきた。

小さい子どもでも「巻く」という作業だけなので楽しく参加できてよかった。

力をいれるところがちょっと難しかった。

丸く作るところが難しかったが、きれいにできて良かった。

すごく楽しく作れた。新博物館にいったら自分の探してみたい。

四角い袋に入れたもみしらが丸くなるのがおもしろかった。

あつという間に時間がたつた！冬こたつに入ってからちくちく作ってみよう。

肩は凝ったが、手作業に集中してリフレッシュする時間がとれた。

千鳥がけに最初驚いたが意外とすぐにできた。家でも挑戦したいと思った。

本格的な松本てまりを初めて作ったので感慨深い。

最初は不安そうだった子どもたちも、綺麗に丸くなったてまりを前に満面の笑みでした。

長時間黙々と頑張る姿に感動し、次世代へてまりの文化を繋ぐお手伝いのでき感激です。

伝統ってなに？というところが体感できたワークショップでした。てまりで繋がるっていいね！

八重菊（地割16等分）の同時かがりを全員が完成させ、楽しかったと喜び合えてよかったです。

Dコース 海老澤美之恵

## 完成お披露目会

6

### 参加者の感想

草木染糸で作られたまりが自然光の中でゆれるのが可愛らしい！

色とりどりの模様がきれいで、また見に来るのが楽しみです。

ゆらゆらと揺れるモビールを見てみると、ほかほかした気持ちになります。

新しい博物館そして松本の街に似合う素敵なモビールだと思います。

富澤千優



2022.11.06



市民のみなさん、てまりと木製フレームの作り手、先生たち、関係者全員で完成に立ち会いました。



てまりが天井へ上がって、揺れ動く様子が、とても綺麗でした。伊藤雄雄 博物館と人々を繋ぐ素敵なモノにメントに携われて嬉しです。

色とりどりのてまりがゆらゆらとゆれる素敵な空間でした。

自分が作ってたまりがさびさびとからうれしかった。

博物館の顔となる美術作品制作に携われる事ができ感無量です。

佐藤美央

## 仮組み上げ

4

### Atelier

仮組みはてまり配置の検討から。東京にある小松先生のアトリエ1階に並べたてまりを2階から眺めて、色と柄と大きさのバランス調整。



2022.5.18-20



2022.6.27-30

仮組み第2段階で木製フレームにてまりが装着されました。1つ1つ重さの違うてまりをどうバランスとるか。テスト作業が続きます。

## 新博物館にモビールが運ばれた!

2022.8.23

東京のアトリエから、松本に無事到着。

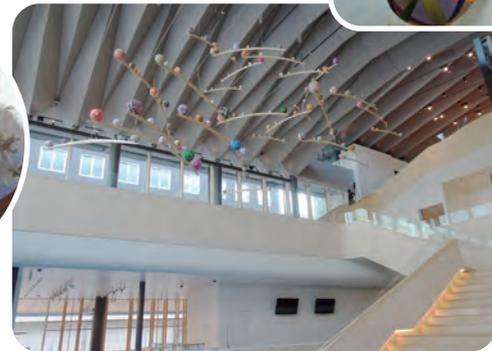


## 現場設置

## ゆっくり慎重に



企画から約2年。ようやく博物館に松本てまりモビールが設置されました。



松本の伝統文化に触れることも良い思い出になりました。佐藤雄史

自分達が作った作品が、ずっとこんじされると思うとすこづれしかった。

松本てまりを多くの方に見ていただき、伝統を継承してほしいです。

未来に繋がる素晴らしいモビールが出来上がり感動しました。

てまりがめだつものとなりにおいていて、すく見つけられました。

とても多くて、どれが自分の作ったてまりか分からなかったけれど、うれしかったです。

自分がつくったてまりが、てんじされて、うれしかったです。

大小、色柄異なるてまりひとつひとつが際立っていました。

娘と一緒に楽しんで作っててまりがこんなに飾られたことに感動。

てまりモビールが上がっていく様子を見る事が出来、感動しました!

揺れるてまりがとても可愛らしく、すうつと見ていたい空間です。

石田綾

それぞれの人もいろいろあるので、来てくれた人に見てほしい。

博物館に市民の作品が飾られる事がとても素敵だと思います。

自分で作ったてまりを、いろんな人に見てもらおうか楽しみです。

祖母が作っていたてまりを、私も作ることができ嬉しかったです。

私の家にはてまりがありますが、こまでしっかりとてまりを見たのは、初めてで博物館の一部に自分の作品があるのは、うれしいです。

素敵なプロジェクト企画、感謝です。懸垂アップの瞬間、胸が熱くなりました!!

沢山の柄のてまりが同時にあるのは初めて見ました。

博物館に自分が作ったてまりがある事が、とてもステキです。

作ったてまりが、キレイにはくぶつ館にかざられてうれしかったです。

思い入れのあるてまりが素敵なモビールの一部になつてうれし。

自分の作ったてまりがいろんなてまりと並んでいてきれいだ。

奥野登茂子

たくさんの人達が力を合わせて作りだされたモビール、松本の誇り。

てまりは楽しく作れました。立派なモビールになって感激です!

自分を作ったてまりが丸く、こんな丸かたづけ、と思えました。

自分の作ったてまりが飾られてうれしかった。たのしかったです。

ビックプロジェクトに参加でき、自分の作品が飾られた事自慢です。

私の作ってたまり。皆様にのしんでいただけると嬉しいです。

産まれてから、ずっと松本で生活していましたが、来年松本を離れる事になり、公共の場に思い出を残すことができ、ありがたく思っています。

自分を作ったてまりが、きれいに飾られていて良かったです。

ありがたうございました。伝統てまりに触れこの会に参加でき良かったです。

出来上りが心配でしたが、まわり作品と並べられて最高。

出来上りが心配でしたが、まわり作品と並べられて最高。

青木千史



松本てまりモビールのてまり全リスト

鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」に「手鞠会」の記事があることから、平安時代に流行した蹴鞠同様、公家や武家の遊びとしててまりが使われていたことがわかります。当初は「つきまり」といって、羽根つきのように連続して上についたり、「あげまり」といってお手玉のように歌に合わせて遊ぶものだったようです。また、模様的美しさから贈り物としても使われ、京都や江戸から全国に伝わりました。現在でも各地で郷土色のあるてまりが作られていて、松本てまりもそのひとつです。



江戸時代初期のてまりつき図「守貞漫稿」  
男女交えてひとつのてまりをついでいる  
国立国会図書館デジタルコレクション

江戸時代中期、綿花が普及し、機織りの際に出る余り糸がてまりの土台に使われるようになる。てまりが弾むようになり、その結果、遊び方が変化して、連続して下につく「まりつき」が女子の正月遊びとして羽根つきとともに全国的に流行しました。松本城下でも武家の子女たちに、もてはやされたと伝わっています。しかし、明治後半、ゴムマリの普及とともに遊び道具としてのてまりは作られなくなっていきました。やがて、ひな祭りなどに飾られる装飾品として残るのみとなっていました。



「子供風俗」手鞠 明治時代中期  
上に投げる子も下につく子もいる  
東京都立中央図書館蔵

### 松本てまりと

### 博物館



### 松本てまりの復活

松本市立博物館に收藏されているてまりで一番古いものは、郷土玩具収集家の住山久治さんが昭和元年ごろに寄贈したてまりです。これは岩崎せんさんが作ったてまりで、江戸期のてまりをほぼ再現しているといわれています。色はあせていますが、とても丁寧にかがられたてまりが11種類あり、「流星」「日の丸」などそれぞれに名前が付けられています。この、博物館に保存されていた岩崎さんのてまりをもとに、松本てまりを再生したのが上條八尾さんです。八尾さんは幼いころ母親に作ってもらったてまりの記憶をたどって、てまり作りをしています。その美しいてまりを見初め、八尾さんに松本てまりの再生を依頼したのが、丸山太郎さんでした。

### 伝統9種の再生

名称	岩崎 せん 昭和元年頃作成	上條 八尾 昭和30年頃作成
八重菊		
八重つる桔梗		
かすり		
柎くずし		
束ねのし		
流星		
遊星		
日の丸		
麻の葉		

丸山太郎さんは松本民芸館を創立し、クラフトのまち松本の礎を築いた方です。この時に9種のてまりが復元され、八尾さんによってさらに5種の模様が考案されています。せんさんが残し、八尾さんが再生した伝統柄9種は、現在、松本てまり保存会のみなさんが博物館オリジナルとして制作し続け、さらに新しい模様も生まれています。多くの市民の努力によって再生された松本てまりですが、岩崎せんさんのてまりが博物館に保存されていなければ再生することができませんでした。松本てまりの歴史の糸をつなぐのに一役かったのが、博物館だったことを誇りに思います。

(松本市立博物館 高木美保子)

### 丸山太郎と松本てまり

八尾さんのてまりは、丸山太郎さんが経営していた中町の「ちきりや工芸品店」で販売されていました。そのてまりが入っていた箱のデザインは、太郎さんが自ら版画におこし、作成して貼っていたものです。

太郎さんは民芸品を蒐集するだけでなく、版画や卵殻細工などの作り手としても活躍していました。また、包装紙のデザインを請け負うなどパッケージデザインにも才能があったようです。



太郎さんが作ったてまりの箱のデザイン。八尾さんのてまりを大事に思っていたことがうかがえます。

太郎さんは松本てまりの復活を喜びながら「てまつか、松本てまりの名に恥じぬような良心的な各種の模様のてまりを受け継いで作ってもらいたい」と信濃毎日新聞に松本てまりの未来を願う心情を寄せています。太郎さんがこの松本てまりモビールを見たらどう思うでしょう。きつと言っていただけではないでしょうか。

### 松本てまりの特徴

伝統的な松本てまりは芯に綿わたを使い、白糸を巻いて地まりを白く仕上げます。「千鳥がけ」という縫い方で色糸をさし、縁起が良いとされる菊などをモチーフにした幾何学模様が描かれます。昔、山繭を芯にして「コトコト」と音がするのを楽しんでしたなごりで、振ると音がする作り方もあります。近年は様々な手法で個性的で美しいてまりが作られています。江戸時代から、それぞれの家庭で、子どもの成長を願いながら工夫して美しいてまりを作ってきました。その思いがなくならない限り、これからも様々な松本てまりが作られていくと思われれます。



現在、松本てまりに代表的な「八重菊模様」のてまり、様々な配色が美しい。

**編集部** はじめに、松本てまりプロジェクトの目的を松本市さん、おきかせください。

### プロジェクトがめざしたもの

**千賀** 新しい博物館は「松本まるごと博物館構想」のもとに建設を進めてきました。私がこの構想で特に面白いと思っっていることは、現地にあるものだけでなく、今行われている産業とか、人々が行っている活動も松本の資産だよな、大切にしていこう、と考えているところです。ですから我々がめざす博物館は、もともと市民と一緒にアクティブにクリエイティブに作り上げていく博物館にしていきたいという思いがありました。市民と一緒につくった作品をシンボルとして新博物館に展示する、これが一番大きな目的でした。

**高木** 何をシンボルにするか、いろいろ探したのですが、やはりてまりに落ち着きました。てまりはデザインや見た

設置施設は博物館のエントランスで大きな吹き抜けだ、と。まずボイド的な空間に対してどう関わられるかと考えた時、空間の中にフリーハンドでドローイングを描くような、空間を拡張するような作品をイメージしたいんだ、と絵を描きながら小松さんに相談しました。小松さんはすぐ模型をつくりはじめてくれました。模型を見ると1階部分は見上げるような感じになるだろう、踊り場の部分だと俯瞰するような視点になる、2階に上がった時には全体を水平視しながらのぞきこむ様な作品になるだろう。この3点の視点を満足させる作品を成立させなくてはいいよね、と話しながらお互いかなり絵を描いてアイデアを出しあいました。

### ワークショップで見えてきたこと

**編集部** 土屋先生、小松先生に検討・試作いただいたのと並行して、大学のゼミの方や市民の皆さんとのワークショップが始まりました。



## 松本てまりプロジェクトを語る

千賀康孝・高木美保子(左)  
松本市立博物館 学芸員

金井 直(中央左)  
信州大学人文学部教授  
1968年福岡県生まれ。1999年京都大学文学部にて博士号取得。2000年豊田市美術館学芸員、2007年信州大学人文学部准教授を経て2017年より現職。

土屋 公雄(中央右)  
彫刻家・環境造形アーティスト  
1955年福井県生まれ。1989年チェルシー美術大学大学院 彫刻科修士課程修了。愛知県立芸術大学美術学部教授、武蔵野美術大学建築学科客員教授、日本大学芸術学部客員教授を歴任。

小松 宏誠(右)  
武蔵野美術大学造形学部建築学科准教授  
1981年徳島県生まれ。2006年東京藝術大学大学院(デザイン専攻)修了。2022年より現職。「浮遊」「動き」「光」をテーマに、美術館での作品展示をはじめ、商業施設など大空間での空間演出も行う。

目の綺麗さは保証されていますが、てまりがただ存在するだけでは、空間を満たす作品にはならないなと強く思い、金井先生に相談させていただくことになりました。

**金井** お話があったのが2020年で、その時は「てまり」と聞いて少々戸惑いました。それは本当にシンボルにふさわしいのかと。私にとつての松本らしさは、むしろ、その水や空気、光にあらわれるものなので。でも、だんだんてまりの大切さもわかってきて、そうすると見せ方が肝心だと思ふようになりました。となると、本当にこういうことに長けたアーティストの方々に関わってもらわないと、と。そこで、公的なコミッションワークのご経験も豊かで、建築への造詣も非常に深い土屋先生がまず浮かびました。

### デザインは空間とむきあうことから

**土屋** 金井先生から現場の資料をいただき、数週間後に小松さんに話をしました。

**土屋** 初めに新博物館の方向性やてまりの意義を聞いて、ワークショップなど、そこできしか成立しないミュージアムづくりができるかと理解しました。それでもその時は、てまりを作ったことがない人に作れるのか疑問でしたが、信大のプレ・ワークショップで、学生さんたちが、初めててまりを形にし、集中しながら楽しんで作り作っている光景を見て、「あ、作れるんだ」と思いました。そして、てまりは特別なものではなく、子どもは子どもなりに、プロはプロなりに作る、そこに幅ができることがわかり、完成されていなくても含めて「てまり」であるとすれば、アートとしても実験的な作品になると思いました。

**金井** 学生たちはその後てまりをいろいろなイベントにくりかえし持ち出して、自分たちのアイコンとして使うようになりました。伝統を現在形に更新していくことを彼らなりにつかんでくれたな、と。てまりの波及効果はかなり大きいということを教員として感じました。

## 伝統を組みこむ 現代的なデザイン

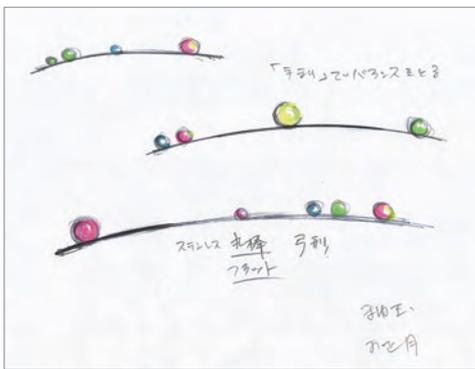
**土屋** 松本の伝統工芸として、てまり以外に家具もあります。主体はてまりですが、それを受けるパーは、民芸家具の技術を使いたいと話しました。

**小松** モビールはハンガーみたいに湾曲した棒の上に、ちよんちよんちよんと鳥のようにてまりが乗った形をしています。あれは最初に先生が描いたスケッチなんです。それを見たとき、ああ、きれいな形だなと思って。スケッチの力つてすごく強くて、その一枚でこれからどこへ進むか共有ができました。あれを見なかったら今の形になっていません。パーが真っ直ぐだったらあの形は成立せず、重心が保てずにひっくり返ってしまうのです。そこから空間や吊元の制約のなかで、どれだけダイナミックに見せていくか土屋先生と考え、面積が限られた吊元からモビール構造でひろがるデザインができてきました。

と思います。そして、降り注ぐ光を受けてモビールの表情も変化します。いろいろな季節、時間に訪れる方々がそれぞれにその魅力を発見してくださるのではないのでしょうか。

**高木** 集まってきたてまりを見た時、柄が様々でどのような作品になるのか期待と不安がありました。土屋先生がワクワクすると仰ってください、不安がなくなりました。多様性があるって混沌としているけども、それに秩序を与えるのが美術の力だ」という土屋先生の言葉が腑に落ちました。

**土屋** 美術の面白さはそこにあります。作品制作は思い通りにいかないことがあり、その中で化学変化が起きる。今回はワークショップが化学変化をもたらしたと思います。出来合いのてまりではないから、あのダイナミックなアートになった。博物館の領域を超えていける入口になったのではないかと感じています。



土屋先生最初のスケッチ



小松先生製作の模型

## 新博物館への期待

**土屋** 子どもたちの声が聞こえたりするワクワクした空間になってほしいと思います。肩の力を抜いて日常の中に博物館があるようになればいいと思っています。

## 完成したてまり モビールを見て

**土屋** もう一つ話したのは、てまりの柄について。伝統的な菊柄だけでなく、1個1個が自立してオリジナルなもの、表情を持つものがいいと思いました。現在の作品として、博物館の中に入ることに重要だと考えました。

**小松** 今回は、新しさ、のチューニングが大切だと考えていました。伝統的なものへのリスベクトを保ちながら、どうすれば伝統の流れの中の今を見せられるかを、土屋先生とよく話しました。

**金井** 現場に吊られたモビールを見て、彫刻として考えると、上下左右からの視点の解決が正確で見応えがあるというのが一番思うことです。当初、1階から来館者が階段を上るのは大変かと懸念しましたが、モビールが入ることによって上る下るという行為が、積極的な意味での遊戯性を帯びてくる。心が開かれるようなリズムを空間に与えてくれる

**小松** 今回、今と昔が自分の中でつながって、てまりや民芸と会話ができました。そういうつながり方って面白いと思った。フォーマットを教えるのではなく、おもしろい今とのつなぎ方をすれば、昔の事実と、今の自分ごとがつながってくる。そうなれば博物館が楽しくなりそうだなと思いました。

**金井** 新しい博物館については、1階の空間を今とつながる形でアクティブに使いたいという考え方が打ち出されてきました。その一つとして、モビールがある。私の考えでは、モビールを含めたあの場全体がある種のミーティングスペースとなり、市民の方がふと訪れてちょっと会話を楽しんで出かけていくそんな場になればと思います。博物館というゆるやかなくくりが大いに機能することを期待しています。

**編集部** 今とつながる息吹きをとらえてみんなでつくったモビールが動いていく、新しい市立博物館らしいそんな風景が目に見えます。本日はありがとうございました。





### 松本てまりプロジェクト

主催：松本市立博物館

協力：金井直

### 松本てまりモビール

アートプロデュース：土屋公雄・小松宏誠

てまり製作：市民ワークショップ参加のみなさん、信州大学金井ゼミプレワークショップ参加のみなさん、

松本てまり保存会、松本てまりの会、手仕事商會すぐり、信州土産たかぎ

(総数146個のうち市民ワークショップでの製作50個)

木製フレーム製作：柳澤木工所(総数28本、材質：セン)

総合製作：株式会社乃村工藝社

松本てまりプロジェクト 松本てまりモビール製作ドキュメント

企画・編集・製作・発行：

松本市立博物館＋株式会社乃村工藝社 ソーシャルグッドプロジェクトチーム